

女子大学生の進路選択

中西祐子（お茶の水女子大学大学院）

I. 問題の所在

女子高等教育の大衆化に伴い、女子高等教育機関の多様性が指摘されるようになった¹⁾。その機能をあえて二分するならば、女子高等教育機関は道具的なものと象徴的なものとに分けることができる（天野1987）。女子高等教育の量的拡大は、短期大学、女子大学、人文科学・家政学系学部といった象徴的機能を請け負う機関によって担われてきたと言われている。

しかし、短期大学にせよ女子大学にせよ、当初の設立目的は職業専門教育から教養教育まで多様である。現在においても、その機能を一枚岩的に捉えることはできない。本研究の目的は次の2点にある。第一に、女子の高等教育機関の多様性を、これまで「女性向き進路」として一枚岩的に捉えられてきた四年制女子大学を対象に明らかにする。第二に、大学組織、とりわけ大学文化に着目し、女子の進路を「水平的に」分化させるメカニズムを考察する。なお、ここで言う「水平的」分化とは、広義には女性内分化メカニズムであるジェンダー・トラック²⁾と同じものである。

II. 実証研究の対象と方法

①調査概要

本研究では、昨年度お茶の水女子大学教育社会学研究室において行われた、「女子大学生の生活と意識についての調査」で得られたデータを用いる。調査の実施時期、対象は以下のとおりである。

時期	1993年11月～1994年1月
対象	首都圏の四年制女子大学7校の学生計624名。
	文系学生を主とする。内訳：A大学116名、B大学39名、C大学120名、D大学136名、E大学67名、F大学67名、G大学79名。
方法	質問紙調査 (集団自記式、持ち帰り記入法を併用)

調査は文部省科学研究費の助成を受け、発表者ならびに耳塚寛明（お茶の水女子大学助教授）、岩村美智恵、長嶋亜紀子、上田智子（以上お茶の水女子大学大学院）、山口恵子（お茶の水女子大学平成4年度学部卒）の計6名で計画、実施したものである。

なお、以下では大学間比較を中心に分析を行うが、大学によってサンプル数に偏りがみられること、専攻、

学年の統制が不十分であることを予め指摘しておく。また、紙幅の都合上、質問紙の分析結果の表は記載を略し、以下では知見のみを紹介する。

②調査対象校概要

まずは、大学組織の特徴（表1）と質問紙への回答から明らかになった各大学学生の出身高校、出身階層（以下「インプット要因」と記す）の特徴を紹介する。大学間で比較したところ、調査対象校は4つのグループに分類することができた。

表1 調査対象校概要

大学	A	B	C	D	E	F	G
創立	1875 (M8)	1900 (M33)	1901 (M34)	1918 (T7)	1915 (T4)	*1881 (M14)	*1924 (T13)
定員(1学年)	520	580	1230	900	410	400	400
入学偏差値	62-55	62.5	60-50	60-58	57.5	55.0	52.5
理系	○	○	○	○	×	×	×
大学院	D	D	D	M	M	D	×

出典：東洋経済『日本の大学'95年度版』

*創立年は前身の学校を含む。*印は戦後短期大学を経て四年制に発展したもの。

※入学偏差値は、全学部の最高値～最低値を示した。

※凡例：「理系」：○～あり、×～なし。

「大学院」：D～博士課程まであり、M～修士課程まであり、×～なし。

第一のグループはA大学、B大学からなる。小規模の総合大学（理系の学部・学科を持つことを指す）であり、博士課程までの大学院を持つ。入学偏差値は上位であり、公立、共学、進学校出身者が7割を越える。

第二のグループはC大学、D大学からなる。第一グループの約2倍の定員を有する総合大学である。入学偏差値は上位から上の中位に位置し、公立、共学、進学校出身者の占める割合は6割以上を占める。

第三のグループはE大学、F大学からなる。小規模単科大学であり、入学偏差値は上の中位である。私立の女子校出身者が多く、進学校出身者は半数以下である。両親に高学歴者が多く、専門・管理職の父親、専業主婦の母親が多い。

第四のグループはG大学のみからなる。小規模単科大学で、大学院はない。入学偏差値は中位であり、他の3グループと比べ、進学校出身者、高学歴の両親、専門管理職の父親の占める割合が少ない。

III. 分析結果

以下では大学文化、学生の進路展望の大学差を示す。

①大学文化の特徴

勉学態度、ファッショニズムへの志向、評価される学生像をもとに各大学の文化を比較した。大学組織とインプット要因の分析結果と同様、調査対象校は4つのグループに分類でき、各グループの構成も同じであった。

第一グループ（A、B大学）は授業出席率は低いが独自の学習を積極的に進める者が多い。ファッショニズムへの志向性は低く、豊富な知識、頭の良さを評価する学生文化が形成されている。

第二グループ（C、D大学）は授業出席率がやや高いが独自に学習を進める者は少ない。豊富な知識、頭の良さを評価する学生文化が存在する。第一グループよりもファッショニズムセンスの良さを評価する者が多い。

第三のグループ（E、F大学）は上記2グループより授業出席率が高いが、独自の学習に積極的な者は少ない。ファッショニズムへの志向性が高く、ファッショニズムセンスや、家柄のよさを評価する学生文化が存在する。

第四のグループ（G大学）の授業出席率は最も高いが、独学を進める者は最も少ない。頭の良さを評価する学生が他のグループより少ないことも特徴である。

②進路展望

希望職業、仕事や配偶者の選択時に重視する事柄、ライフコース展望をもとに、各大学のアウトプットを探った。これまで同様、4つのグループに分類できた。

第一のグループ（A、B大学）は専門職や総合職系事務職の希望者が多い。配偶者の地位や経済力への志向は低く、職業優先型のライフコース選択者が多い。

第二のグループ（C、D大学）は総合職系事務職希望者が多いが、専門職希望は少ない。配偶者の地位や経済力を志向する者は第一グループより多い。家庭優先・両立型、職業優先型のライフコース選択者が多い。

第三のグループ（E、F大学）は一般職系事務職の希望者が多い。配偶者の地位や経済力への志向が最も高く、中でも家柄の良さを重視する者が多いことが特徴である。育児優先型のライフコース選択者が多い。

第四のグループは準専門職、一般職系事務職希望者が多く、リーダー的地位への志向が低い。配偶者の地位への志向は低いが、経済力への志向は高い。ライフコースは家庭優先・両立型、育児優先型希望者が多い。

IV. 考察

以上から得られる知見は次のとおりである。第一に、一枚岩的に捉えられがちであった女子大学の内実は多様であり、大学組織、インプット要因、大学文化、アウトプットの各側面において分化していた。

第二に、各グループのインプットースループット一

アウトプット面での特徴は対応しており、その間に一種の「トラック」の存在を考えることができる。

第三に、本研究が対象とした大学間には、女子高等教育機関の両極性を見ることができた。これは第一グループと第三グループとを比較すると明らかである。第一グループは道具的機能を、第三グループは象徴的機能を果たす女子高等教育機関と言える。また、偏差値ランクが近似の大学間で以上のような両極性が確認されたことは、高等教育機関におけるジェンダー・トラックの存在を考察する上で重要である。

第四に、第三グループの高等教育利用法は母親の間にも確認することができる。第三グループの特徴は高学歴の母親、専業主婦の母親が多い点にあった。このことは女子高等教育の象徴的機能を利用する層が第三グループにおいて再生産されている可能性を示唆する。

さて本研究では、大学組織とインプット要因、大学文化、アウトプットとの対応を明らかにした。しかし、ここで示された対応が、特定の大学に特性の学生が入学した結果なのか、大学が社会化エージェントとして機能した結果なのかは定かでない。大学組織の社会化・配分機能を対象とした先行研究には、社会化機能に着目したカレッジ・インパクト研究（柴野1969）や卒業後の役割・地位への配分に着目した研究、両者の視点を併せ持つチャーター理論（丸山1980, 1981a, 1981b）がある。ここでの知見に最も整合的な理論を探索することは、今後に残された課題である。

【註】

- 1)たとえば、天野(1988)、米川他(1983)など。
- 2)ジェンダー・トラックとは、性役割観に基づく進路分化メカニズムのことであり、女性のライフコース分化と密接な関わりがある。なお、学業成績に基づくトラックとは独立のものである。（中西1993）

【参考文献】

- 天野正子(1986)『女子高等教育の座標』、垣内出版。
 天野正子(1987)『婚姻における女性の学歴と社会階層』、『教育社会学研究』42、70-91。
 天野正子(1988)『性と教育』研究の現代的課題』、『社会学評論』155、266-283。
 丸山文裕(1980)『大学生の職業アスピレーションの形成過程』、『名古屋大学教育学部紀要』27、239-249。
 丸山文裕(1981a)『大学のチャーティング効果に関する一考察』『IDE』219、72-80。
 丸山文裕(1981b)『大学生の就職企業選択に関する一考察』、『教育社会学研究』36、101-111。
 中西祐子(1993)『ジェンダー・トラック』、『教育社会学研究』53、131-154。
 柴野昌山(1969)『カレッジ・ソーシアリゼーションのもたらす役割葛藤』、『京都大学教育学部紀要』15、180-193。
 米川英樹他(1993)『女子高等教育の構造変動と進路分化の規定要因』、日本教育社会学会第45回大会発表資料。